

ハイデガー身体論の射程：異質な他者と共存するために

TAKAYASHIKI, Naohiro / 高屋敷, 直広

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

HOSEI TETSUGAKU : BULLETIN OF HOSEI SOCIETY FOR PHILOSOPHY / 法政哲学

(巻 / Volume)

16

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

12

(発行年 / Year)

2020-03-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00023068>

ハイデガー身体論の射程

——異質な他者と共存するために——

高屋敷 直 広

はじめに

本稿の目的は、従来の主要なハイデガー解釈とは異なり、『存在と時間』^①を中心に、「存在者 (Seiendes)」の「存在 (Sein)」を開示するものとして、「現存在 (Dasein)」の「身体 (Leib)」を説明することにある。この説明を通じて、本稿では、自分とは異なる他者と「共存在 (Mitsein)」する^②にも生きるために、「身体」が一つの積極的な可能性を秘めていることを提示する^③。

ところで、現代思想の成果の一つに、哲学的な主題として「身体」へ光を当て直したことが挙げられる。とりわけ

二〇世紀以降の現象学は、「身体」をたんなる物質と見なしたり、意識や精神の下位に位置づけたりするのではなく、主体であると同時に客体でもある「身体」の両義性への着眼によって、伝統的な主客二元論を克服する可能性を見出した。さらにこのことは、身体的に存在している自己が異なる「身体」の他者へどのように接近可能なのかという他者理解への道を開いたのであった。後期フッサールやM・メルロ・ポンティに代表されるこうした新たな道は、J・L・ナンシーやD・フランクルのフランス現代思想を経由しつつ、現在の現象学研究にまでおよぶ^④。

他方、従来の主要なハイデガー解釈では、ハイデガー自身が「身体」を十分に論じ得なかったこともあり、概して

「身体」の意義が解明されてこなかった。筆者の見解では、このことは、たんに、自己の「時間性 (Zeitlichkeit)」を重視する彼の存在論において「身体」が軽視されてきたことを意味する以上に、他者との共存在を解釈する上で重要な意味をもつ。なぜなら、ハイデガー自身が繰り返し強調したように、現存在が本質上「他者たちとともにある共存在である」(SZ, 118) ならば、現存在相互の「身体」を伴う現実の関係が解明されるべきだからである。筆者によれば、ハイデガー本人も、従来の主要なハイデガー解釈も、存在者としての自己と他者の差異やその関係を解明できなかったゆえに、「実存論的独我論」という批判を克服できないままだったのである。したがって、M・ミカルスキーの言葉を借りれば、ハイデガーにおいて存在忘却 (Seinsvergesenheit) に対抗するあまり生じてしまったように見える「身体忘却 (Leibvergesenheit)」を克服することによって、それぞれが固有な自己と他者の生き生きとした共存在を明らかにすべきである。⁴⁾

そのための手掛かりは、実は『存在と時間』における「身体」をめぐる論述にある。本論で明らかにする通り、この書でハイデガーは、存在一般の意味を明らかにしようとして自己の時間性の解明を優先させたために、本来「身体」の働きを抜きには成立し得ない実存論的分析論において、

「身体」の主題的な論述をあえて退かせた (Vgl. SZ, 108)⁵⁾。かえってそのことが、自己と他者の関係を明らかにする道を塞いでしまったように思われる。それに対して筆者は、近年の有益な研究も手掛かりにしながら、「身体」に対するハイデガーの慎重で示唆的な論述の含意を明らかにしていく。結論を先取りすれば、「身体」は、自己と他者の共存在を可能にするものとして明らかになるであろう。

具体的には、以下の手順で三つの主要課題を考察する。

第一の課題は、伝統的な意味での「身体」や肉体 (Körper) ではなく、実存論的な意味での「身体」を考察することである。この考察を通じて、「身体」が実存論的な空間性 (die existenziale Räumlichkeit) を可能にする点が明らかになる (第1節)。

第二の課題は、「身体」が空間性を生起させながらどのように存在者との出会い (Begegnen) を可能にしているのかという点を考察することである。この考察を通じて、「身体」が、ロゴスの開示機能を担うことによって存在者の存在を開示する点が明らかになる (第2節)。

第三の課題は、「身体」の開示する働きに即して共存在を検討することである。この検討を通じて、存在者の存在の開示に与するだけでなく、自己である現存在と他者である「共現存在 (Mitdasein)」の関係を結ぶという「身体」

の意義が明らかになる（第3節）。

1. 空間を許容する「身体」——時間性と空間性の等根源性を手掛かりに

さて、『存在と時間』で「身体」は、「手 (Hand)」の例に象徴されるように、現存在の日常的な生における道具 (Zeug) の使用や交渉 (Umgang) の前提となっている。本節では、ハイデガーの空間理解に基づいて、目立たず存する「身体」の実存論的・存在論的な働きを明らかにする。というのも、彼は、現存在特有の空間性を明らかにする際に「身体」へ注意を促すからである (Vgl. SZ, §33)。

まずは、ハイデガーの空間理解の要点を押さえておく。彼は、デカルトに代表される近代的で物理的な空間理解を派生的だと考え、それに先立って現存在の空間性を位置づける。一言で言えば、現存在の空間性は、現存在と世界 (Welt)、および現存在と世界内部的存在者の動的な循環関係を意味する。この循環関係は、現存在と道具の關係から導かれる。ハイデガーによれば、道具は固有な空間性「方域 (Gegend)」をもつ。個々の道具は、配置される置き場 (Platz) に置かれているゆえに「適所 (Bewandnis)」を得ている。方域とは、これら「適所」が構成する道具全

体の空間性を意味する (SZ, 84)。現存在は、この方域に對して「遠さを取る」こと (Entfernung)」と「方向づけ (Ausrichtung)」という二つの契機によって関わっている (SZ, 104ff)。遠さを取ることは、「距離・隔たり」や「遠ざけること」といった通常の語法と異なり、ハイフンで強調されているように、遠さを取りはらい「近くにないませること」を意味する。この働きを通じて現存在は、数ある道具を自分から適切な近さへ置き、必要に応じて使うことができる。またこの場合、上下・左右・前後などのある方向が伴われながら道具との近さが保たれている。その働きをするのが方向づけである。つまり現存在の空間性は、有意義な近さと方向の網の目として、道具と關係し続けることにより生起しているわけである。ハイデガーは、これら二つの契機から成り立つ現存在の空間性を「空間を許容すること (Einräumen) —— 実存 嚮 (Existenzial) として理解された——」 (SZ, 111) とどう実存論的・存在論的な働きだと主張する。この語は、「何かを片づけること」といった通常の語法と異なり、世界内存在 (In-der-Welt-sein) において道具を空間的に布置することを意味する (Vgl. SZ, 368)。

注意すべきなのは、以上の「空間を許容すること」が、道具との日常的な關係に終始せず、そもそも存在者との出

会いを可能にしている点、すなわち、その意味では現存在の空間性がある根源的な性格をもっている点である。確かに、『存在と時間』の基本的な意図と戦略にしたがえば、世界内存在の根拠が時間性にある以上、いわば時間性が存在の根拠である。しかし、同時に彼は、時間性への還元主義を明らかに否定しており、空間性が時間性である意味で等しく根源的であることを示唆しているのである (Vgl. SZ, 104, 369)。彼は、空間を許容する現存在の空間性が、道具の方域という「空間に出会うための先行性」という意味では「ア・プリアオリなもの」であると明言する (SZ, 111)。換言すれば、基礎存在論的には、世界への「超越」が脱自的・地平的な時間性に基づいて可能であるとしても、世界を開示しながら世界内部的存在者と出会うためには、空間を許容する働きもまた先行していなければならぬ。このような空間性のア・プリアオリな性格は、空間性を可能にする時間的 (テンポラル) な諸条件に言及される時でさえ次のように再度強調される。

「現存在は——文字通りの理解で——空間を許容してしまっている。現存在は、身体物体 (Leibkörper) が満たす空間部分のなかで眼前的にのみ存在しているのでは決してない。現存在は、実存しながら、そのつど

すでに活動空間 (Spielraum) を許容してしまっている」 (SZ, 367)。

活動空間とは、上述の遠さを取ることと方向づけによって開かれた、道具との循環関係を意味する (Vgl. SZ, 369)。つまり、「空間を許容すること」が、「それ自身としては」世界や世界内部的存在者を含むあらゆる空間性を先行的に開示し許容しているのである (Vgl. SZ, 367)。この許容がなければ、いかなる存在者にも出会うことがない。それゆえ、世界内部的存在者の空間性を成り立たせ、存在者との出会いを可能にするという先行性を厳密にくみ取るならば、現存在の空間性は、存在者との出会いに關しては、当然の出会いを可能にするア・プリアオリなものである。

以上の解釈が成り立つならば、空間性を時間性へたんに還元してしまうことは不可能である。なぜなら、時間性が、それ自身のみで存在者を直接に出会わせるわけではないからである。したがって、筆者によれば、空間性のア・プリアオリなこの働きは時間性と等しく根源的だと理解すべきである。L・アルワイスの言葉を借りれば、次のように言うことができる。現存在の空間性は、「もはや空間——時間の二元性に応じて確定されることのない空間性」である。つまり、「根源的に、現存在は空間的である」と言う

べきである。⁽⁸⁾ 時間性と空間性のそれぞれがア・プリオリであることを認めて初めて、ハイデガーによる次の発言の真意も理解され得るであろう。「存在論的に十分に良く理解された『主観』、つまり現存在は、ある根源的な意味で空間的なのだ」(SZ, 111)。

次に、筆者の見解では、以上の論点を踏まえてこそ「身体」に対する『存在と時間』の一節が理解されるべきである。

「現存在の『身体性 (Leiblichkeit)』⁽⁹⁾ は、ここでは論じるわけにいかないある固有の問題性を自ら蔵しており、このような身体性における現存在の空間化は、『方向づけによる』左右の方向にしたがつてともに際立_てら_れて_いる (mit ausgezeichnet sein)」(SZ, 108)。

上述の通り、方向づけは、遠さを取ることと不可分に空間性を生起させている。「身体」は、右手と左手の区別に顕著なように、この生起のうちで方向づける働きを遂行しているものである。方向づけが空間を許容するための構成契機であり、「身体」がこの方向づけとともにあるならば、「身体」は、「空間を許容すること」それ自体を成り立たせる実存論的な契機でなければならぬはずである (SZ, 109f, 111)。言い換えれば、「身体」は、存在者と出会

う際の空間化の根源的な作用に直接関わり、実存論的な世界の開示を常にすでに成り立たせているのである。

H・フニは、空間性に対する「身体」のこのような関与を簡潔ながら指摘している。すなわち、現存在の「身体」は、世界内存在の空間化を「根源的にともに担うもの (essursprünglich Mittragendes)」である。⁽¹⁰⁾ 筆者の見解では、「ともに担う (mittragen)」とは、「空間を許容すること」とともに、ひいては時間性とともに、現存在の空間化を可能にすることを意味する。フニによれば、世界内存在の空間化は遠さを取ることと方向づけによって成り立つのだから、「身体」が「共作用 (Mitwirkung)」していなければ成り立たない⁽¹¹⁾。換言すれば、「身体」が関与していなければ、世界や世界内部的存在者との関わりはもとより、空間を許容する現存在の空間性そのものが成立し得ないのである。そして上述の通り、「空間を許容すること」が存在者との出会いをア・プリオリに可能にするのであるならば、それに与する「身体」もまた一つの先行的な働きとして現存在に存在者を出会わせるとい_う根源性をもつ、と理解すべきである。

したがって筆者は、「身体」が、実存論的な空間性を成り立たせる「実存嚮」であり、かつ空間性のうちで様々な存在者との出会いを可能にするものであると解釈する。

2. 「接触すること」の含意——ロゴスの開示す

る働きと「身体」

前節で明らかにしたように、「身体」は、空間性を成り立たせる働きを担い、かつ空間性のうちで存在者との出会いを可能にするという意味で根源的なものであった。ただし、根源的であるとは言え、「身体がどのように存在者との出会いを可能にしているのか」という問いがさらに生じるように思われる。そこで本節では、存在者と出会う際の「身体」の働きをさらに立ち入って明らかにする。

筆者の見解では、そのためには『存在と時間』における「接触すること」(Berührung)に着眼する必要がある。周知のように、この語は、事物(Ding)同士の物理的で空間的な位置関係から、現存在の空間性、および現存在と存在者の空間的な関係を区別するために強調される実存論的な概念である(Vgl. SZ, 53ff)。従来の主要な『存在と時間』研究では顧みられてこなかったが、この語には「身体」との連関が潜んでいる。ハイデガーは、事物同士は決して「接触することができず」、ひたすら「並存するだけ」だと言う。なぜなら、接触するためには「出会うことができる」という現存在しかもたない性格が必須だからであ

る。換言すれば、その存在を目掛けて何かをそれとしてあらわにするあり方が先行しているからこそ、現存在は存在者へ関わることができるのである。逆に言えば、事物はこのような存在様式をもたないゆえに、諸事物がいくら物理的に近くにあるうとも、せいぜい空間内部で並存するに過ぎない。例えば、煙草と灰皿は、それ自体で出会っているのではなく、喫煙という行為を通じて、すなわち現存在を介して初めて現存在との近さのうちに生起する。それによつてさらには、煙草と灰皿のそれぞれが「近くにある」と見なすこともできるわけである。ハイデガーは、存在者とのこのような関わりを「出会い」として強調する。出会いという実存論的な性格を有するゆえに、「接触すること」は、実存論の一つとして実存論的な空間性を構成する不可欠の一契機である。そうであるならば、筆者の見解では、「接触すること」は、空間性の生起を本質的に担う(ともに担う)実存論的で空間的な「身体」の一樣態と見なされるべきであろう。

ところで、出会いがあるものをそれとして開示することであるならば、バウアーも指摘するように、出会いには事象そのものをあらわにする「ロゴス」の働きが前提されているはずである。この場合のロゴスとは、ハイデガーがギリシア語の原義を活かして解釈する「語り(Rede)」とし

てのロゴス」である (Vgl. SZ, 32ff.)。語りとしてのロゴスは、「語られているもの」を「そのもの自身に即してそのものの方から見えるようにさせること」、つまり何かを本来的に開示することを意味する。それゆえ、開示が音声化されているかどうかという問題は派生的ではない。彼は、開示するというこの働きをロゴスの根本性格と捉える。この点を踏まえるならば、接触は、声に出して語ることではなく、時には自分一人で遂行されるものの、何かを真正に開示するロゴスの働きを備えているはずである。言い換えれば、接触とは、身体的にあるものと触れ合いながら、ロゴスの開示機能を遂行することである¹²。

以上の身体的に「接触すること」は、一見すると、例えば「このコーラの瓶に触れている時に生じる」というように、表面的な接点を伴う関係だけを指摘しているようにも思われる。だがパウアーも注意するように、接触は、実際の接点の有無を超えてどこまでも存在論的に理解されるべきである。彼によれば、接触は、平均的で日常的な見方に対する対象としては「消え去る (verschwinden)」¹³ ごとに、「身体」がロゴスの働きと統一的に連関しながら存在者を開示していることを意味する。換言すれば、接触とは、思索が存在者との実存論的な「近さ」のなかを動くことである。前節の成果を踏まえて言えば、現存在は、「身体」

を一つの中心に空間性を生起させるなかで、実存論的な意味での身体的な接触によって、触れずとも存在者を開示しながら布置している。したがって、接触とは、「身体」によって何かへ〈態度を取る〉という現存在のあり方を言い当てた概念なのである。

本節までの成果をまとめると、次の二点が明らかとなった。第一に、「身体」は実存論的な空間性を成り立たせる。第二に、「身体」はロゴスの開示機能を担い、存在者をその存在に即して開示しながら出会わせる。

3. 「身体」に基づく自己と他者の共存在

——異質な他者と共存在するための一つの可能性

さらに本節では、現存在と道具などの物との関係に留まらず、現存在と共現存在の關係にまで考察を進める。他者との出会いは、「身体」を介してどのように解釈可能であろうか。この問いに答えるために、筆者は、先述のミカルスキーの解釈もさらなる手掛かりとし、ハイデガーが「メタ存在論 (Metalogie)」のうちで「身体」に即して取り上げた共存在の議論を検討する。

まずハイデガーによれば、メタ存在論とは、現存在を常にすでに取り巻いている事実的な「存在者を全体として

テーマにする」存在論である (GA26, 199)。換言すれば、メタ存在論は、平均的で日常的な交渉相手としてではなく、かつ数量で総計される事物としてではなく、存在了解にさえ先行する仕方であるところにある事実として、存在者をありのままに問うことである。それゆえ、この場合の存在者とは、たんに非本来的なものなどではなく、存在論が問うべき「現事的 (faktisch)」なものとして理解されているのである。¹⁶ 重要なのは、メタ存在論のうちでこそ、実存する者の間の共存存在、しかもそれに対する「身体」の関与を『存在と時間』よりも明確に読み取り得ることである (Vgl. GA26, 173ff)。

次に筆者は、(示唆的ではある) ハイデガーの議論の要点を以下の二点にまとめる。

第一の要点は、ハイデガーが、存在者全体への事實的に被投的な「分散 (Zerstreuung)」のうちで共存存在を積極的に解釈する点である。¹⁷ 上述の通り、彼は、全体としての存在者があるという驚くべき「現実実性」を強調するようになるが、分散とは、現存在がこの現実実性へ理由もなく投げ入れられてしまっていることを意味する。彼は、被投性が「現存在の根源的な「性格」である」との主張に続けて、分散を「被投的分散 (die geworfene Zerstreuung)」ないし「超越論的分散 (die transzendente Zerstreuung)」

と特徴づける (Vgl. GA26, 174)。その際に彼はまた、被投的分散が「現存在それ自身の分散、すなわち共存一般」(GA26, 175) だと明言するのである。換言すれば、被投的分散を通じて、共存存在が現実的的自己と他者の関係として強調されている。ハイデガーによるこれらの主張を踏まえて、ミカルスキーは、ハイデガーの言葉を用い「本来的な実存の態度 (das eigentliche Existenzverhältnis) としての共存存在」として、事實的な実存相互の関係を「共——実存者 (Mit-Existierende)」(Ibid.) の関係と捉える。¹⁸ つまりこの関係は、現存在がそのつど自己本来的で固有名あり方をするなかで、同様に固有名あり方をする他者へ態度を取ることを意味する。

第二の要点は、以上の関係を可能にする被投的分散が、実は「身体」によって主導されるという点である。この点について、筆者は、まずミカルスキーによる次の主張を手掛かりに考案を進めてみたい。「身体性は、〔被投的〕分散の内部における組織化の要因 (Organisationsfaktor) として、〔事實的な〕性差と空間性へ〔被投的〕分散を主導的に組織化するだけでなく、事實的な相互存在へも〔被投的〕分散を主導的に組織化する」。¹⁹ 換言すれば、被投的に分散された実存相互の事實的な関係は、「身体」がその分散を主導することによって組織化される。この理解は、ハ

イデガー自身の指摘に基づく。というのも、ハイデガーは、被投的分散に際して、現存在の事実性を本質的に可能にするという意味で、「身体」を組織化の主導的な要因と見なすからである（Vgl. GA26, 173ff.）。ハイデガーによれば、「身体」、「性差」、「空間性」は並列に捉えられるものではなく、第一次的に「身体」が空間性への被投的分散を主導し、その空間性のうちで個々の性差が可能となり、お互いの関係が生起するのである。同時にまた、組織化は、決して何らかの「類的」なものへ存在者を整理することでもなく、またたんなる事物として現存在を整理することでもない。この組織化とは、どこまでも諸々の現存在を事実的に多様化すること（*Mannigfaltigung*）を意味する。

以上のように「身体」が主導する組織化は、多様化されたそのつどの実存相互の関係へ現存在を導く。

「そのつど事実的な身体性と性差は、…（中略）…事実的な現存在の共存在が、他の諸可能性が遮断されないし閉ざされた特定の事実的な方向へどの程度押し進められるのかということの説明する」（GA26, 175）。

ミカルスキーによれば、ハイデガーによるこの主張は、現存在の日常的なあり方やその共存在を消極的に指摘して

いるのではなく、それぞれ固有にある現存在が、他の諸可能性が閉ざされたほかならぬ自分として事実的に関わり合うことを積極的に言っている。というのも、上述の通り、事実性への被投的分散が「共存在一般」であり、かつ、「身体」が主導する組織化を通じて諸々の現存在が多様化されるならば、自己と他者は、それぞれが差異化された固有な存在を有する者としてお互いに関わるほかないからである^{②③}。換言すれば、共存在は、それぞれの「身体」というある種の制約を通じて、逆に現事実的で多様な自己と他者の関係として成り立つのである。

以上の二つの要点をまとめると次のように言える。共存在は、メタ存在論的に見れば、他の共現存在との事実的な共存在への被投的分散を意味する。この意味での共存在は、特に、「身体」が主導する組織化の働きを通じて、自己である現存在と他者である共現存在の関係として成り立つ。

しかし、筆者の見解では、以上のように理解するだけでもまだ不十分である。なぜなら、「身体」が主導する組織化がなぜそもそも可能なかということを、言い換えれば、組織化において現存在と共現存在の出会いがなぜ可能なかということの説明できなければ、異質なものの相互の関係としてまで共存在を明らかにしたとは言えないからで

ある。ハイデガー本人だけでなく、ミカルスキーもまた結局この点を説明できていない。そこで、これまでの考察全体を踏まえて最後に筆者は、本稿の結論を次のように集約することによって、今述べた問いへ応答する。

本稿第1節で明らかにしたように、「身体」は、空間性のうちで存在者との出会いを可能にするという意味で根源的なものであった。そして本稿第2節で明らかにしたように、「身体」は、ロゴスの開示機能を担った接触という働きを通じて、存在者と出会いながら存在者をその存在に即してそのつどあらわにするのであった。これらの成果を踏まえてより厳密に理解すれば、「身体」が主導する組織化とは、接触によって存在者と出会いながら、他者が開示されることによって成り立つはずである。つまり、「身体」にロゴスの働きが伴っているからこそ、そのつど他者がその存在に即して相応しく開示され、その結果、組織化による自己と他者の現実的な差異化が成り立つのである。したがって、筆者は、「身体」の開示機能と組織化という二つの実存論的な働きが、世人同士の関係でも、共通の歴史的・社会的背景を共有する者同士の関係でもない、それだけが固有で異質な自己と他者の共存を可能にする、と結論づける。

おわりに——「身体」に基づく「対話」へ

さて、本稿で得られた結論によって、ハイデガー研究上の本質的なさらなる課題もまた明らかになったように思われる。その課題とは、自己と他者だけでなく、第三者も含めた複数の現存在がお互いの立場からどのように関わり合うことができるのか、という課題である。現在告発されている「身体」を巻き込んだ暴力現象に鑑みれば、複数の異質な現存在が、一方で自己の身体的な存在に基づきながらも、他方でお互いの「身体」が置かれた状況の制約に配慮し、「言葉(Sprache)」による「対話(Gespräch)」の関係を築いていくことがさらに求められているであろう。

このような課題の解明は今後の研究に譲る。しかしながら本稿では、「身体」がロゴスの働きを担いそのつど他者を開示していくという点を明らかにしたことによって、複数的な対話の関係を構築していくための確かな可能性を開いた。

《注》

(1) ハイデガーからの引用は、『存在と時間』は単行新版(*Sein und Zeit*, Max Niemeyer, 18. Aufl., 2001)を用ゝSZ

- と略記、その他の著作はハイデガー全集 (*Gesamtausgabe*, Vittorio Klostermann, 1975ff.) を用いGAと略記し、それぞれ巻数および頁数をアラビア数字で併記し本文と注で出典を記す。引用文中の強調点と「」を用いた補足は筆者による。なお本稿では、考察の方法上、一九二三年より前を「初期」、二三年から三〇年までを「前期」、三一年から四五年までを「中期」、四六年以降を「後期」と設定する。
- (2) 本稿は、筆者の課程博士論文「ハイデガー『存在と時間』における〈対話的な場〉の究明——「身体」・「語り」・「倫理」の統一的解釈」(二〇一〇年三月)の成果を踏まえて、法政哲学会第三九回大会での発表原稿を加筆・修正したものである。特に参照が必要な場合には、拙論や関連文献を注で指示する。

- (3) Cf. D. Franck, *Heidegger et le problème de l'espace*, les Éditions de Minuit, 1986; H. Schmitz, *Der Leib*, De Gruyter, 2011. J = L・ナンバー (大西雅一郎訳)『共同身体』松籟社、一九九六年参照。
- (4) M. Michalski, *Freundaufnahme und Mitleiden. Zur Grundlegung der Sozialphilosophie im Denken Max Schelers und Martin Heideggers*, Bouvier Verlag, 1997, S. 238.
- (5) 「身体」をめぐる前期思想と後期思想の関連は別稿で論じる。
- (6) ハイデガー身体論の解釈史について『存在と時間』解釈を中心に一瞥しておく。筆者によれば、従来の解釈史は二つの立場に大別できる。第一の立場は、先述のナンシーらのようにハイデガーへの批判から独自の身体論を構築する

立場である。それに対して、ミカルスキーを嚆矢とする第二の立場がある。この立場は、現存在の空間性と不可分に「身体」を解釈するC・ラーゲマンなどの近年の研究に顕著な立場である。なかでもP・パウアーの研究は、本論で後述する通り「身体」が有するロゴスの働きへ着眼する点で事柄的にも新しい。筆者は、これらの意義と制限を踏まえて自己と他者の共存存在を明らかにする。Cf. C. Lagemann, *Zur Räumlichkeit der Gefühle. Befindlichkeit und Lebenswelt bei Heidegger*, in: M. Großheim, A. K. Hild, C. Lagemann, N. Trčka (Hrsg.), *Leib, Ort, Gefühl. Perspektiven der räumlichen Erfahrung*, Verlag Karl Alber, 2015, S. 133-151; P. Baur, *Phänomenologie der Gebärden. Leiblichkeit und Sprache bei Heidegger*, Verlag Karl Alber, 2013.

- (7) この点については前掲拙論第二章、またL・アルワイヌの解釈も参照。Cf. L. Alweiss, *The world unclaimed. A challenge to Heidegger's critique of Husserl*, Ohio University Press, 2003, p. 122. (工藤和男・中村拓也訳『フッサールとハイデガー』晃洋書房、二〇一二年、一五四頁参照。)
- (8) Alweiss, op. cit. p. 124. (前掲訳書、一五六頁。)
- (9) 筆者の見解では、(7)でハイデガーは「身体」の実存論的で空間的な性格を強調するために「身体性」の語を用いている。ただし彼自身は、「身体」と身体性を明確に使い分けておらず、むしろ二つの語が混同されるなかで現存在の身体的なあり方に言及される。筆者は、身体性の語によって実存論的に理解された「身体」が指示される点に鑑みて「身体」の語で統一して解釈する。

- (10) H. Hüni, Die sprechende Bewegung, Leiblichkeit und Dasein, in: M. Riedel, H. Seubert, H. Padrutt (Hrsg.), *Zwischen Philosophie, Medizin und Psychologie. Heidegger im Dialog mit Medard Boss*, Böhlau Verlag, 2003, S. 106.
- (11) Hüni, *ibid.*
- (12) Vgl. Baur, a. a. o. S. 146ff.
- (13) Vgl. Baur, *ibid.* 140.
- (14) メタ存在論については前掲拙論第1章と第4章参照。
- (15) 本稿では「了解や企投に先行してそもそも自分と何かが存在している」という事実性の根本性格をより精確に捉えるために、必要に応じて「事实的 (faktisch)」を「現実的」「事実性 (Faktizität)」を「現事実性」と強調する。
- (16) 現実的な存在者を問う必然性が基礎存在論のうちですぐに示されている点に注意すべきである (Vgl. SZ, 436f.)。前掲拙論第1章と第4章参照。
- (17) 『存在と時間』を含む分散の理解は前掲拙論第4章参照。
- (18) Vgl. Michalski, a. a. O. S. 236f., 239.
- (19) Michalski, *ibid.* S. 239.
- (20) Vgl. Michalski, *ibid.* S. 238f.
- (21) Vgl. M. Staudigl, *Phänomenologie der Gewalt*, Springer, 2015. 牧野英二・小野原雅夫・山本英輔・齋藤元紀編『哲学の越境と知の変換——伝統的思考法を問い直すための手引き』法政大学出版局、二〇一九年、序論参照。